

「自然」を護る,「大山さん」を助ける： 伯耆大山におけるナラ枯れの本質をめぐる対話

Preserving Nature, Caring for *Daisen-san*:
Dialogue About the Essence of Japanese Oak Wilt in Mt. Daisen

中 島 佑 輔
NAKASHIMA, Yusuke

要 約

本稿は、伯耆大山（以下、大山）で発生した樹木の病気の一つである「ナラ枯れ」をめぐる展開されている論争に焦点を当てている。鳥取県議会において、ナラ枯れ対策としてミズナラを伐採し萌芽更新することが、国立公園内における「自然保護」の論理に沿っているか否かという点が問われた。本研究では大山山麓地域において、「ナラ枯れ」への対策として萌芽更新を行うことをどのように考えるかという点を中心に言説を調査した。萌芽更新を行うボランティア団体を含む山麓地域において活動する人々に対して、参与観察及びインタビューを行った。調査の結果、萌芽更新の是非をめぐる問題は、ナラ枯れという事象が自然現象かそれとも社会的な問題であるのか、自然に“人間”が含まれるのか否か、そして“人間”が自然の摂理へ介入してよいのか等、複数の問題と連動する、「ナラ枯れ」現象の本質をめぐる論争でもあることが明らかになった。県議会等における議論及び調査した言説において、人間以外の動植物の視点、複数の異なる研究者の知見、そしてフィクション作品における概念等が、「ナラ枯れ」という事象の本質について語るアクターとして登場した。その中でも、県議会や萌芽更新を行う団体内において言及された「大山さん」についての調査から、かつては“大山”の景観が天候の重要な指標であり生活の調整を司っていたこと、そして「大山さん」が暮らしを護ってくれているという感覚があることが示唆された。

キーワード：ナラ枯れ, 自然保護, マルチスピーシーズ民族誌, 「大山さん」

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1 背景 | 4 ナラ枯れの事象と論争の広がり |
| 1-1 ナラ枯れ急拡大の発生 | 事例1 巻き込まれ方の違い |
| 1-2 「自然保護」における「人間」と「自然」 | 事例2 自然を護る |
| 1-3 マルチスピーシーズ民族誌 | 事例3 大山さんを助ける |
| 2 ナラ枯れをめぐる科学的議論 | 5 考察と展望 |
| 3 大山のナラ枯れ被害と対応 | 6 参考引用文献 |

1 背景

1-1 ナラ枯れ急拡大の発生

2020年8月、鳥取県西部に位置する大山の森林においてナラ枯れ被害の急拡大が発生した。「ナラ枯れ」と呼称される事象について、森林総合研究所主任研究員の高畑は、「カシナガが病原菌を

伝搬することによって起こる、樹木の伝染病の流行」と要約している（高畑 2008：27）。神戸大学大学院農学研究科教授の黒田によると、ナラ枯れは病原菌 *Raffaelea quercivora* の感染により起こる萎凋病であり、養菌性キクイムシで体長約5 mmのカシノナガキクイムシ（ナガキクイムシ

科, *Platypus quercivorus*) (以下、略称として「キクイムシ」または「カシナガ」と表記) により病原菌が媒介される (黒田 2020: 120)。

大山のナラ枯れ被害の急拡大は、人々にどのように受け止められたのか。日本海新聞 (2020年8月27日掲載) は、ナラ枯れによって赤褐色に変色した大山の森林を目視した人々のショッキングな反応として、岡山市の自然観察指導員柴田氏の「愕然」、また大山ブナを育成する会代表吉岡氏の「山を知っている者ほど涙が出る」といった表現を記載した。他方では、ナラ枯れを必ずしもネガティブな事象として捉えない見方も登場した。例えば後述するように、鳥取県議会においてナラ枯れ対策事業の方針をめぐる質疑が行われ、「自然」を保護すべき国立公園内において人間が自然の摂理に介入することの是非が問われた。平井鳥取県知事は、ナラ枯れ被害対策として、ナラの樹が枯れる前に伐採し切り株から芽を出させる「萌芽更新」を「外科手術的な方法」と喩え、一方の「自然の作用を重視する立場」や「長い目で見れば自然の摂理の中の1ページという見方」と対置した (鳥取県議会議事録2020年10月1日: 2020年9月定例会)。また大山で活動する自然ガイドの中にも、ナラ枯れ被害対策としての萌芽更新を「人間目線」とする声もあった。

1-2 「自然保護」における「人間」と「自然」

そもそも、「自然保護」と呼ばれる論理はどのように形成されてきたのだろうか。インドの環境史研究者ラマチャンドラ・グハはイギリス、インド、ドイツ、アメリカといった国々の文脈を結びながら、環境主義 (environmentalism) が形成される思想潮流の分析を行った。私たちが何気なく用いる「自然保護」の観念の潮流には、産業革命によって破壊されていく田舎のロマンチックな風景を護ろうとするイギリスを中心とする運動、科学的に自然資源を漸進的に成長させようとする科学的保全の動き、開拓によって失われる「原生自然=ウィルダネス」を護ろうとするアメリカを中心とする運動、3つの潮流がある (Guha 2014: 8-9)。

第一の、田舎の風景を護ろうとする潮流は、産業革命と植民地支配による、田舎あるいは植民地の生活の荒廃への反動として現れた。イギリスの

湖水地方出身の詩人ウィリアム・ワーズワースの様な田舎の住民によるものと、マハトマ・ガンジーのような植民地主義への抵抗が主導的な動きとして現れた。第二の潮流である科学的管理としては、植民地支配に際して、植民地の資源管理を科学的に保全する研究が蓄積された。ヨセミテ国立公園等、国立公園の運営にも関与している潮流である。そして第三に、「原生自然=ウィルダネス」の観念の成長の文脈がある。ジョン・ミューアは、木材の安定供給や治水などの有用性を根拠とするのではなく、「原生自然=ウィルダネス」として自然それ自体の価値を護る運動を推進した。週末のキャンプやトレッキングといったレジャー産業と結びつくこと等も19世紀における国立公園の制定に影響した。また幾つかの国立公園の制定は、国家のアイデンティティに関わる風景を表象する狙いもあったとされる (Guha 2014: 72)。

国立公園が設立される経緯について、大山を研究した例もある。大山は古くから山岳信仰の対象であり、修験の道場としても知られていた。平安期には大山寺も開かれ、近世には霊場としての大山が広く知れ渡るとともに、庶民の間にも大山寺への参詣が広まっていった。しかし1875年の明治政府による神仏分離政策により、大山信仰は衰退していった。神事以外の登山は明治まで許可されていなかったが、三角測量、植物研究などを目的に開始された。1920年代、スキー等の近代的レジャーの場として注目され始めた。廃仏毀釈運動や寺領の没収により衰退しつつあった大山は、国立公園としての再生を企図したと考えられる。大山寺集落において国立公園設置に向けた運動が開始され (大山保勝会)、県を挙げての一大組織へと発展した。1936年、大山は日本で初めて指定された12国立公園のひとつに選ばれた (長尾 2012: 159-162)。

国立公園の施策における自然保護の思想的背景について、環境倫理学者の鬼頭秀一の論考を参照する。鬼頭はオーストラリアの哲学者ジョン・バスマアを参照し、「保全 (conservation)」と「保存 (preservation)」の定義を紹介した。保全とは、〈……にそなえた節約〉、人間の将来の消費のために天然資源の保護であり、保存とは、〈……からの保護〉、人間のためというよりも、人間の

活動を規制しても保護しようとする考えである（鬼頭 1996：40）。功利的な価値ではなく、それ自身価値のあるもののゆえに保護しようとする観念が「保存」の根拠である。

鬼頭は「原生自然＝ウィルダネス」の価値について、ミューア等のロマン主義的な思想においては、人間と自然の交流の重要性が強調されており、あくまでも人間を介した自然の価値であったとする。そのため、保全の立場が自然の「使用価値（instrumental values）」を根拠とするのに対して、ミューア等が護ろうとした「原生自然＝ウィルダネス」は、自然の「内在的価値（inherent values）」に基づく保護であったとする。しかしその後、「原生自然＝ウィルダネス」は、人間が関係を持たなくても、無生物を含めて様々な生物の間の平等関係において存在しており、そうした存在の中にある価値として自然の「本質的価値（intrinsic values）」に重きが置かれるようになる。本質的価値に基づいて「原生自然＝ウィルダネス」を護る立場を、明確な「保存」の立場とした（鬼頭 1996：101-102）。こうした環境倫理における変化は1960年に発生した。鬼頭は、国立公園の施策の思想的背景には、「原生自然＝ウィルダネス」の本質的価値があるとする（鬼頭 1996：103）。

そのうえで鬼頭は、「保存」の立場と人間のために自然を「保全」する立場は両方とも、自然VS人間の二分法を前提にした立場であることを指摘した。なぜ二分法が問題になるかと言うと、非西洋社会やグハが指摘したインド等の第三世界における自然と人間の密接な関係性に対して、「保存」と「保全」の二軸に整理される従来の「自然保護」は適用できないと考えられるからである（鬼頭 1996：112-113）。

大山のナラ枯れ対策をめぐる論争においても、一見すると、人間が利用する資源のために森林を管理しようとする人間中心主義と、自然そのものを護ろうとする人間非中心主義の対立として捉えられる。実際、ナラ枯れについて調査を行う筆者に対して、「どっちの切り口で行くかやな」と述べて、二択を提示した自然ガイドさんもいる。

本研究は、「人間中心主義か人間非中心主義か」という、人間と自然を対置させた二分法の図式（鬼頭 1996：119）に、ナラ枯れをめぐる論争が

回収され平行線を辿ることへの違和感から開始されている。

鬼頭は、白神山地の入山禁止問題として「原生自然の保護」のために入山を禁止された人々の反対や賛成の様々な立場の分析を行った。その上で鬼頭は、議論が混乱しないためには、「人間と自然とのかかわりに関する明確な枠組み」が必要であるとした。鬼頭は「社会的リンク論」として、近代以降における、人間と自然の間の社会的・経済的リンクと文化的・宗教的リンクが切断されている様子を分析し構造的に捉えることで、今後どのようにリンクをつないでいくかを構想することを提議している（鬼頭 1996：245）。

日本において鬼頭の視座は、人間と野生生物の多義性をめぐる環境社会学等の議論において引き継がれている。例えば丸山は、鬼頭の「社会的リンク論」も含む幾つかの論考に言及し、環境社会学を始めとする人文・社会科学の視座において共通するものとして、「人間と自然の関係に対する動的かつ多元主義的な現状認識であり、自然保護概念の普遍的な妥当性に対する疑問」であるとした（丸山 2008：10）。丸山は「ニホンザル」が〈野生〉か否かをめぐる問題のフィールドワークを行っており、〈野生〉であるか否かには複数の判断基準があり流動的であるとする。そして、「自然物は本来多義的であり、同一の自然物であっても人間とのかかわり方に応じて主観的には異なる存在となる」と述べた（丸山 2008：11）。

本稿における「ナラ枯れ」問題においても、「ナラ枯れ」という事象の多義性は分析の一つのポイントとなる。しかし分析方法として、様々な立場を人間と自然間における社会的・経済的リンク及び文化的・宗教的リンクの繋がり方または切れ方を分析する段階にはないを考える。なぜなら、自然と人間の間の繋がり方を、枠組みを用いて分析する方法では、どこまでが「自然」の範囲で「人間」とはどのような関係があるのか等、両者の輪郭が不安定な現場の動きを捉えることができないと考えるからだ。鬼頭自身も、人間と自然の二分法を前提にしているのではなく、人間と自然のかかわりあいの「全体性」をあくまで関係論的に捉えて考察するための一つのステップとして、「人間」と「自然」という概念を用いると述べている（鬼頭 1996：122）。本研究では、「人間」

と「自然」という概念規定を研究者としては行わないことをより徹底することで、大山山麓のナラ枯れを契機とする、「人間」と「自然」の関係性の構造が提示され争点となる動態の記述を試みる。

1-3 マルチスピーシーズ民族誌

ナラ枯れ対策として大山の森林にどのように介入すべきか（あるいは介入しないべきか）という争点は、どの生物の視点を借りて語るかによって、大山の「自然」の範囲や、護られるべき時間的・空間的スケールが変動する。この動態を捉えようとする本研究は、「マツタケ」を調査したアナ・ツインの論考にある、「森の生命を語るに際しては、種がつねに正しい単位であるとは限らない。『マルチスピーシーズ』〔複数種〕という用語は、人間至上主義の枠を超えていくための代替語にすぎない」、「どの単位を使用するかは、語り手が語りたい物語による」（ツイン 2019：242）と述べて提示したポイントを参照している。ポイントとは、「マツタケ」の生成や輸出に関わる複数のアクターはどこまでも微細に追跡可能であるように、「ナラ枯れ」という事象をどのように捉えるかという人々の言説を可能な限り記述していくという「記述的な研究」（ツイン 2019：333）を行うということである。

本研究とアナ・ツインの研究の違いは3つある。1つめは、本研究は、「ナラ枯れ」という事象の線引きを変動させようとする、人々の語りにアクターが登場してくる力強い動きに注目するという点である。アナ・ツインはマツタケという対象を中心に、マツタケが人間を含む様々な生物種との絡み合いの中で生成され、様々な文脈や仕組みにおいて採取され食品として輸出されている、アッセンプリッジ（集まり）としての“マツタケ”を描いた。一方で本研究では、“ナラ枯れ”という現象がどのように認識されるべきかという局面において、人間を含む様々な生物種の立場が語りにおいて多声的に登場し、各々にとっての森の健康の単位を提議していると捉える。

2つめは状況の切迫性である。“ナラ枯れ”とは何か、どのように対応するべきか、そしてそもそも“自然”とは何か等の、“ナラ枯れ”の本質についての回答が求められていたという状況があ

る。先の議会で「大山というシンボリックなところに今（ナラ枯れ）被害の中心がやってきました」と平井知事が述べたように、ある意味では分かりやすく切迫性のある問題である。「“ナラ枯れ”は〇〇という事象である、だから△△するべきだ」という事象の定義と行動が伴っている点は、本研究の特徴である。

3つめは、科学的な議論が“ナラ枯れ”という事象の線引きに影響を与えている動態も記述及び考察対象として含めている点である。特に議会という議論の場が、対策を議論する場でもあると同時に、ナラ枯れの本質をめぐる議論の場でもあり、その議事録や議論の影響を分析対象に含めているという点は本研究の特徴であると考ええる。

本稿の目的は、ナラ枯れの認識をめぐる問題と、自然の認識をめぐる問題とを結びつけて論じることにある。分析の資料は、ナラ枯れ被害の発生した大山におけるインタビューや記事、並びに参与観察によって得られた民族誌的資料を用いる。

2 「ナラ枯れ」をめぐる科学的議論

本節では、「ナラ枯れ」という事象をめぐる科学的議論の論点を整理する。

まず重要なのは、ナラ枯れにおける病原菌の特定に関するトピックである。衣浦は、ナラ枯れ発生メカニズムの研究過程を原因解明以前と以後で分けている（衣浦 2008：46-48）。まず、被害地域においてどのような事象が相関しているのかというところから研究が開始されている。1990年代には、ナラタケ（キノコ）が被害地域で観察されたことから、ナラタケ説が提唱されていた。衣浦曰く、そのことには、養菌性キクイムシ類が樹木を枯死させる事例が殆どないという昆虫学の常識があったという。また、被害を受けた樹木の根における菌根（根と菌根菌との共生体）が健全な樹木の場合と比べて観察されなかったことから、酸性雨説も提唱された。1990年代半ばに、枯死木とカシナガから、ナラ菌（*Raffaelea quercivora*）と呼ばれる特定の菌類が優占的に分離されることが報告されるようになった。樹木へのナラ菌の接種実験は試行錯誤のもと、枯死が再現され、ナラ枯れの原因がナラ菌であることが判明した。また他方では、カシナガ以外の虫が入り込まないコン

トロールされた状況において、樹木にカシナガを接種する実験によって枯死が再現された。このことによって、ナラ枯れはカシナガとナラ菌が原因であると確定した。

小林らによるナラ枯れの科学的議論に関するレビューでは、カシナガがナラ菌のベクターであることの特定、カシナガが穿入した後に樹木が枯死するメカニズムの解明、通水機能が低下するメカニズムの分析、ナラ菌が有する酵素が通水機能を停止させるメカニズムの分析、等の複数のトピックが挙げられている。また、カシナガ繁殖阻害要因に関するトピックとして、樹液の効果、穿入履歴による耐性、天敵等が挙げられている（小林・上田 2005：442-443）。

また小林らによると、被害の発生要因に関する説として、先のナラタケ病や酸性物質を濃縮した雪の影響説の他に、温暖化によるカシナガの分布域の変動や樹木のストレス説が挙げられている。ただし、温暖化は1960年代以降の燃料革命に起因するとし、直接の原因というよりも被害拡大の要因として挙げている。燃料革命をナラ枯れ被害拡大の主要因とする説は主流であると考えられる。燃料革命に伴う薪炭林の放棄によって、樹木の大径化とそれに伴う倒木の発生増加によるカシナガの繁殖源が増加したことが主要な説明となっている（小林・上田 2005：446）。

また他にも、カシナガ及びナラ菌が日本国内の在来種であるか、国外から侵入したものであるかという議論もトピックとして存在する。

小林らは、薪炭林の放置を主要なナラ枯れ被害拡大の要因としており、持続可能な循環型社会への移行が急務であることを提議している（小林・上田 2005：446）。また、「ナラ枯れ」という事象に関する社会学の研究として、エネルギー革命と過疎化に伴い発生した社会問題として分析した先行研究もある（福島 2017）。ナラ枯れをめぐる科学的議論は主に、「保全」の立場の議論に位置づけられると考えられる。

3 大山におけるナラ枯れ被害の状況

2020年度の大山周辺の国有林被害木は6,700本に及ぶ。前年度は3,856本であり、前年度比で見場合急拡大と言える。

鳥取県は2020年度9月補正予算として、事業名

「ナラ枯れ対策事業」に対して972万円を計上した。鳥取県森林づくり推進課が作成した「令和2年度一般会計補正予算説明資料」によると、事業の目的と概要は以下の通りである。

8月中旬以降、昨年まで被害が少なかった桧水高原を中心にナラ枯れが広範囲に発生しており、秋季に向かって更に被害が拡大する可能性が高い。そこで、大山の景観の保全と枯損木の倒木等による事故の未然防止を図るため、本格的な観光シーズンを前に、国や市町と連携して大山環状道路を中心に早急に伐倒除去を実施する。

9月14日に行われた、予算について本会議前に議論を揉んでおく常任委員会における報告によると、「8月中旬以降、大山周辺においてナラ枯れ被害が急激に拡大したことを受けて、8月28日に国・県・市町の関係者が招集され、「緊急現地検討会」が行われた。さらに9月4～6日には、ヘリコプターを用いてナラ枯れ被害の発生状況と分布状況の全容の把握が行われた。そして9月10日には「鳥取県ナラ枯れ被害対策協議会」（以下、対策協議会）として、市町、鳥取森林管理署、大山隠岐国立公園事務所、県（緑豊かな自然課、文化財課、林業試験場、森林づくり推進課等）の担当者が招集された。協議の結果、重点対策区域を中心に、特に大山を環状に走る道路周辺を「景観及び安全対策として」駆除の実施が方針として決定された。常任委員会ではこの過程が説明された後、議員より予算及び伐倒業者の確保等について質疑が交わされた。また委員会において、対策協議会に後述する民間の植林ボランティア団体を含めるべきではないかという意見が登場した。今後調整を行いながら事業を進めていくこととし、委員会においてナラ枯れ被害対策に係る補正予算が承認された。

民間のボランティア団体、「大山ブナを育成する会」（以下、ブナの会）における中心的な活動は樹木「ブナ」を大山に植えることである。

ブナの会はナラ枯れ被害区画の一部における現地調査を8月27,8日に行い、被害状況に関する基礎資料を作成した。そして9月3日に、神戸大学大学院の黒田慶子教授を大山山麓の大型宿泊施設

の大会議室に招きセミナーを催した。ブナの会メンバーのみならず、報道関係者、鳥取県議会議員、鳥取県職員等も出席した（計51名）。

黒田教授は2010年11月まで森林総合研究所に所属しており、ナラ枯れに関して複数の著書を発刊している。黒田教授がセミナーでまず主張したのが、「大山の麓は里山」ということであった。「国立公園ですが、樹木を燃料として使った歴史が長い。使わなくなったからそのまま見守っても、原生林にはならない。結果としてナラ枯れの発生」という議論が続いた。

ここで、黒田教授によって配布された資料等を基に、ナラ枯れ発生のメカニズムを詳しく説明する。ナラ枯れとは、糸状菌（カビ）による萎凋病のことである。ナラ菌の媒介者が体長5mm程度のカシノナガキイムシ（*Platypus quercivorus*）である。6月～8月にかけて、まずカシナガがナラ類、カシ・シイ類等の幹に入り込み孔道を作る。そこで交尾、産卵する。集合フェロモンによって多数のカシナガが誘引され飛来し、マスアタックと呼ばれる集中加害が起こる。カシナガは一夫一妻で、雌が背中に保持する共生菌を餌として子育てを行う。カシナガはナラ菌を含む何種類かの菌を保持している。ナラ菌はカシナガが穿入し掘った孔道内で活発に伸長する。ナラ菌の周囲では樹木の細胞が防御反応を開始し、微生物の繁殖を抑制する二次代謝産物を生産するが、菌糸の伸長とマスアタックによる感染拡大には追いつかない。二次代謝産物のうちテルペンなど疎水性の物質が導管内壁に付着することで、樹木は水分通導機能を失う。ここまでの、ナラ枯れ発生メカニズム関する自然科学的な説明である。

しかし黒田教授は同時に、ナラ枯れの「社会的要因」の大きさも重要な要素として取り上げる。伐採されることなく30～40年以上経過して大径化した木にカシナガは穿入しやく、放置された里山二次林で被害が増加している。従って、近年におけるナラ枯れ被害の深刻化は社会の変化とも連動している。

黒田教授はセミナー開始時、「大山の麓は里山」と主張した後、「自然とは？」というスライドで4枚の写真を見せた。米国アパラチアの原生林、篠山市の旧薪炭林と田畑、徳島県祖谷溪の人工林と畑、日本庭園無鄰菴、4枚の写真を同時に見せ

て、「自然と思うものに手を挙げて」と言い順番に指していった。すると米国アパラチアの原生林のみに手を挙げそれ以降は挙げなかった人が多かったようで、「実はどれも自然なんです」と、「自然」概念自体の複雑性を整理するスライドに移行した。欧米の「自然」とは Wilderness, 「原生自然」を指しており、この「自然」概念に基づく「自然保護」は、「原生自然をそのまま保つ」という意識が強い。他方で日本における「自然」は人との関りが濃く、千年以上前から里山の資源を利用しつつ持続させており、管理している場所である。大山は「国立公園」として「自然」が保護されているが、保護区域として設定されたエリアにも、里山としての履歴が残っている。原生林としての「自然」を護ることに対する問い直しがセミナーの場で提示された。

黒田教授が言及した「遷移」の考え方も重要になる。人為的攪乱があると、森林の植生遷移は途中で止まり二次林となる。里山林は伐採という人為的攪乱を続けて植生遷移を途中で停止させており、資源利用によって生態的なバランスが保たれてきた歴史がある。一度人が手を入れた森林は、人間の手が離れた後も自然本来の遷移に移行するのではない。「偏向遷移」のまま遷移の最終段階としての「極相林」に到達する可能性がある。

そこでセミナーで提案された方策の柱がミズナラの「萌芽更新」である。伝統的里山林は農用林でもあり、15～30年周期で伐採と収穫が行われていた。樹木は切り株からの芽生えで再生する能力があるので植林不要であった。黒田教授の提案では、大山でナラ枯れ被害に合っているミズナラの樹木を早急に伐採し、完全に枯れる前に萌芽更新を狙う。枯れた木は倒木の恐れもあるので安全管理上でも急務であるとした。そして完全に枯れてしまったところにはブナを植える。ブナの会はノウハウを持った集団としてとして活かされる可能性に言及している。

黒田教授の結論は、「ナラ枯れは、里山の放置のために起こった。枯れを止めることは困難であり、将来のことを考える時期」というものである。黒田教授の提案は大山を部分的に里山として管理していく方針になるので、資源のサイクルも同時に構築していく必要がある。もちろん急には難しいので、見本となる場所としてモデル地区を

設定シトライアルを行うことが提案された。また森林管理と木材の資源サイクル構築の一環で、散策道の整備によって森林の観光資源化、所謂グリーンツーリズムの展開も提案された。

黒田教授は発表内において、日本の森林利用の歴史を論じたタットマン、Cによる著書を紹介した。この著書は後にブナの会のメンバーの一部も閲読している。さらに、黒田教授の発表資料は後にPDFで配布され、ブナの会はそれを用いて小学校等でナラ枯れ問題に関する講演を行っている。森林利用の歴史に関する知見が伝播する契機であった。

黒田教授のセミナーには、鳥取県議会議員も複数名出席していた。その内の一人が、立憲民主党所属の森雅幹議員であった。ナラ枯れ対策事業に係る9月補正予算要求を受けて鳥取県議会では、同年10月1日に予算に対する一般質疑が行われた。そこで森雅幹議員は平井知事に対し次の様な質問を行った（以下、鳥取県議会議事録2020年10月1日：2020年9月定例会より）。

・森雅幹議員

恥ずかしいのですが、大学時代は植物生態学などということをやってしまして、一応自分なりの見解は持っているつもりで（いろいろな人と）お話をいたしました。そうしますと、多くの方が国立公園内とそうでないところとはやはり大きく対応が違うということをおっしゃいました。大山は非常に大事に思っている方々、そしてナラ枯れが問題だと思っていられる方々の主催でナラ枯れ対策についての勉強会がありまして、神戸大学の教授の黒田先生のお話を聞く機会もありました。この中では、先生は、私にとっては非常に乱暴な御意見でして、とにかくミズナラとかナラ類はこれの虫にかかってはみんな枯れてしまうので、事前に切ったほうがいいですよ。〔中略〕勉強会の中で黒田先生もおっしゃっていたのですが、江戸時代の文献の中にナラ枯れが出てくると。私もそれを確認したのですけれども、長野県のどこかの神社の社叢でのナラ枯れがそこには記してありました。ですから過去、大山の記録はないのですけれども、過去何百年とかという範囲で見えていくと、大山でもそういうことが起こっ

てきた、そのような可能性がある話です。ナガキクイムシももともと日本にいた虫ですし、それからナラ枯れを起こすこの菌ももともと日本にいたものです。そうすると、例えば1300年祭（大山開山）とかということがありましたけれども、1,300年、あるいはまた2,000年、3,000年とかというそういったスパンで見えていくと、十分にそういうことが起こって、それがまた大山の生物の多様性によって、またよみがえっている、そういうことだと私は認識しています。したがって、本来、大山の国立公園内とは自然を守るということだと思うのですけれども、それは現在生きている生物、動植物、生物を守るのではなくて、私はその地域固有の多様性を守ることだというふうに思っています。ナラ枯れになってそこに枯れている木の下には、その地域固有の種がたくさんあります。〔中略〕種は本当にタイムマシンのように、何十年も何十年もそこで待っていて、何百年というものもあるのでありますが、それがあの日、条件が整ったらそこで発芽をスタートしていくという、そういった仕組みが大山の植生というものの多様性の中で植生が維持されている。そのところに人間の自然の攪乱を持ち込むということが本当にいいのかどうかということをよく考えながらいろいろなことに手をつけていたきたいということは申し上げておきたいと思っています。

森雅幹議員が言及した江戸時代におけるナラ枯れ発生の根拠は、2010年に公刊された論文である（井田・高橋 2010）。この論文が議論の中で力を持つのは、カシナガを「在来」のものであり「自然」のものに位置づけるからである。黒田教授らの人為由来としてナラ枯れを捉える言説と対抗している。この森雅幹議員の質疑に対し平井知事は、次のように回答した。

・平井知事

いろいろな考え方があると思うのですね。〔中略〕森議員がおっしゃるように、どちらかというと自然の作用を重視する立場の方もいらっしゃるれば、やはりこの森をむしろ守るのだというようなことで、どちらかというと外科手

術的なそういう手法を考える、そういうこともあると思うんですね。〔中略〕森議員のようなお立場の考え方も当然あると思いますし、長い目で見れば自然の摂理の中の1ページという見方も当然でしようかと思えます。〔中略〕まだ十分解明されていないところはあるのですが、ただ、森林被害自体の重みというのもありますから、ただ手をこまねいていいかというところでもないのかもしれませんが、特に大山の景観を大切にしたいという片方の方々もいらっしゃるって、やはりそうした枯れた枯死木につきましては、伐倒すべきだというような議論も片方ではあります。その辺よく今後も皆さんの御意見を聞きながら戦略を練ってまいりたいと思います。

森雅幹議員の質疑の後、同じ立憲民主党に属する浜田妙子議員が弁論を行った。

・浜田妙子議員

大山は我が家から車で30分、2階からはその姿も眺められ、四季を通じ何かにつけて気軽に訪れ、その恩恵にあずかってまいりました。その山が泣いている、助けてと叫んでいる。あるいは早くから紅葉ですかと誤解されるほど奥大山まで広くナラ枯れで染まることになってしまいました。心が痛みます。〔中略〕行政中心の協議会があることを私も存じ上げております。ナラ枯れには気候変動の問題も関わってくるでしょうし、生態系がどうなっていくのかという問題についてもしっかりと高い知識を持っていかなければいけないのかなというふうに思ったりもいたします。そういう意味では、大山を愛して山の中に入り込んで、ある人はチョウチョウの研究をされたり、ある人は高山植物の研究をされたり、それからまた地質学の研究をされたり、もちろん水の研究をされたり、木の研究をされたり、専門家はたくさんいらっしゃるし、その方々の経験値というのはすごく大きいというふうに思ったりいたします。もちろん大学に行けば専門家の方々もいらっしゃいます。誰か一つだけ情報を聞いて、それで全て済むというものではないです。〔中略〕山というもの、自然というものについての理解、深い理

解を、大山さんが魂の山、心の山、我がふるさとというのであれば、そこを理解するレベルを上げていくということが、私たちは大山の恩恵に向けてきちっと払う礼儀ではないかなというふうにも思ったりもいたします。山に関わる民間の人たちが情報交換できる場が最低限必要と考えます。

このような政治の場を巻き込みながら、「大山さん」を助けること、そして「自然」を護る事の齟齬が顕在化した。二人の議員はしかし、必ずしも個人的な意見を述べているのではない。両者は関わる人々が異なっており、共有されている自然の認識が異なるのである。

4 ナラ枯れの事象と論争の広がり

ここでは、大山のナラ枯れをめぐる反応の聞き取りを主とする記述から、「自然」を護ることと「大山さん」を助けることの違いを明らかにしたい。

事例1：巻き込まれ方の違い

2020年8月18日深夜に、「大山ブナ便り NO310」が電子メールで筆者を含むメーリングリストに送付された。「大山のミズナラのナラ枯れ病 大小木の関係なくやられている！」という見出しに続いて、8月16日朝早く、伯耆町住民の会員で山仲間から「大山の色が変わっている」と連絡を受けたことが書かれている。赤茶色に変色した麓の森林の写真が添付され、次のように書かれている。

この写真をみて。コロナウィルスじゃないがカシナガのクラスターの大発生だ。ミズナラの木ほとんどがやられているだろう。ここ10日ほどで色が変わった。恐ろしい！昨年までは言いたいことを言ったが、今年は言葉が出ない。……ああ、大山がかわいそうだ！〔中略〕うー、悔しいね。これから毎日この姿をながめながら考えよう。知恵も力も出てくるかも！……私だけでなくたくさんの方がこの姿を見て考えてもらえれば、良い知恵が間違いなく出てくるだろうと思う。国立公園内だからってあきらめないで頑張ろう。

ブナ便りの文章は、大山ブナを育成する会会長の吉岡淳一氏によるものである。ここで吉岡氏が、ナラ枯れが「国立公園」内で起きているとしても諦めずに知恵を出すことを強調している点は本稿の要訣に関わる点である。ここで「国立公園」としての大山は、人間が介入できない自然の聖域として立ち現れている。

吉岡氏は大山の森林に関する情報のスポークスマンの一人であり、メディアからも取材を受けている。日本海新聞は同年8月27日朝刊で、『大山ナラ枯れ深刻 大山寺－榎水高原「昨年の倍以上」 日野郡へ南下の恐れも』という見出しで報じ、吉岡氏の反応も記載している。

大山ブナを育成する会の吉岡淳一会長（77）は「山を知っている者ほど涙が出る」と言葉を詰まらせる。8月上旬から森林に異変があり、お盆明けごろから一気に広がった。ドングリの不作による餌不足でイノシシなどが人里に下りてくる可能性もあるとし、「現状を自分の目で確かめ、自分事として問題に向き合ってほしい」と呼び掛ける。

ここで吉岡氏は、ミズナラの木が枯れることで、ドングリが不作になり、イノシシが人里へ下りてくるという連関を提示している。吉岡氏の言葉に登場したイノシシは、山と人里を横断することで、ナラ枯れが私たち人間の問題でもあることを主張するものであると考えられる。

同じ日本海新聞の記事の続きには、大山自然歴史館の館長矢田貝繁明氏の推察として、「大山寺周辺は3年ほどで収まるだろうが、被害は日野郡など南に移るのでは」と記載されている。

日本海新聞に登場した2人の自然のスポークスマンによるナラ枯れに対する構えの違いは、他の言説が展開される複数の場において度々現れるものだ。自然歴史館にて、筆者は、矢田貝氏と自然ガイドKとの3人でナラ枯れ対策について議論することができた。

・矢田貝氏

（枯れる前に萌芽更新する対策について）横手道の森林は国所有だ。「保全」を目的に森林環境保全税500円を払っている。森林のために

使うことはいい。切って更新するのは、それは自然を護ることにになる。萌芽更新自体は悪いことではない。若返りはいいけどもう厳しい。ミズナラの被害は今年がピーク。2019年の被害が10だとしたら2020年に50、来年からは40、10、3という風に減っていく。ナラ枯れは台風みたいなもの。来年もまだ枯れるだろうけど、全て枯れることはない。どれが自然かは難しい。森雅幹議員はこの前、話を聞きに来た。森雅幹議員の意見は真つ当だ。ただ木を切るのは自然を護るのではない。材にするとか椎茸にするとか、資源を有効活用するならいいけど。人の手が入ることで維持されていたものを、そこに住んでるものを護るのは自然を護るということ。木を切っても炭窯に持って行って炭焼きにするとかをちゃんとせんとだめだ。別の問題で、木を切っても国立公園から運び出すことは難しいかもしれない。伐採を請け負う森林組合も高齢化している。県が金を出したとしても、ミズナラだけを切るのだとしても労力的に難しい。萌芽更新自体が人間の攪乱かと言うと違う。湿地や草原に木を植えたいという人いるが、そこにいた生きものが困る。

[2020年10月17日聞き取り]

矢田貝氏は森雅幹議員の意見に賛同はしているが、人間の介入が即、生態系の攪乱に当たるようには考えていない。むしろ、現に生息している生物たちの生息環境を守ることが自然を護ることであると考えている。その一方で、県との協定のもと萌芽更新を行う場合は、保全として成立していることも重要であると考えている。護るべき「自然」の概念的不現実性を認識したうえで、森林の所有者の許可を得ること、その保全に県民が税金を払っていること、現実的にミズナラの搬出や資源としての活用が難しいと考えられることなどの諸状況を勘案し、「台風」のように過ぎ去るナラ枯れを静観しているように考えられる。矢田貝氏は、ナラ枯れを、台風の様に一時的に巻き込まれはするがいずれ去り行くものとして静観している。

事例2 「自然」を護る

矢田貝氏と著者と共に会話をした自然ガイドK

の意見は次のようなものだった。

・自然ガイド K 氏

キツツキにとっては、ミズナラの立ち枯れは巢になる。逆に蝶々は困るだろう（幼虫はミズナラの葉っぱを餌とするので）。ナラ枯れは難しい……。自然と言っても、見る角度によって全然違ってくる。ナラ枯れを観て酷いと思うのは人間目線と言えるのかもしれない。

[2020年10月17日聞き取り]

また、大山で活動する自然ガイド K 氏は、ナラ枯れが森に生息する生物によって善し悪しが変わるという点と、そもそも「自然」を認識する主体によって全く違う様相が見えるという点を結び付けている。この「自然」を認識することの不可能性からすると、ナラ枯れ対策を企図する試みもまた、複数の視点の中の一つであり、それは「自然」を捉えたことにはなり難いのである。

そして自然ガイド K 氏は、人間がナラ枯れそして自然を観る視点を他の生物の視点を借りることで相対化している。

また自然ガイド K 氏は、大山の宿泊施設で主催された「ナラ枯れ」を観るエコツアーでガイドを務めた。このツアーは、鳥取県の職員の目に留まり、どのような方向でガイドを行ったのかについて問い合わせがあったという。自然ガイド K 氏は8名の参加者を連れて、雨の中大山を歩いていく。次のようにガイドを行った。

・自然ガイド K 氏

人間的に言えば嫌だなと思っていても、自然的には喜んでるやつもいる。倒木に産卵する虫もいる。カマキリとか。逆に言うと葉っぱを食べてる蝶々やドングリを食べてる奴らは困るかもしれない。そしてネズミとかを食べてるやつも困るかもしれない。裏表がある。プラマイが自然界ではある。良い曲線と悪い曲線何パターンかあってうまい具合に動いている。例えば、全部枯れました。でも百年後にはどうなってるかわからない。知り合いで屋久島のガイドさんの話で、観光資源の森林が台風で倒れることについて、それが自然だと言っていた。氷ノ山では全部枯れたり、木が谷に落ちていったけど、

今新しいのが生えて生きている。百年後に元に戻ったり違う形になっているかもしれない。〔中略〕木が倒れることで喜んでるやつもいるので、一概にどっちがいいかというのは難しい。キクイムシが増えた理由については、研究者は色々言っているけど、多分森を利用しなくなったから。鹿の問題とかもそう。人が森に入らなくなって。私たち人間が森を使わなくなってツケが回って来たのかもしれない。原因は虫だけど、虫だけが悪者というのではないかな。大山は原生林に近い。神社とかお寺とかで木が切れなかった。これが森で起きてる現象です。今年は10倍くらい酷い、観た感じ。でも深刻って人が思ってるだけ？色んな面がある。サイコロみたいに。 [2020年9月26日聞き取り]

エコツアーの参加者の反応の一部は、宿泊施設のプロログに掲載された。福山から参加したおばあちゃん F は次のように感覚が変わったという。

・おばあちゃん F

枯れていく森をみていると、つらくなり、何かしないといけないんじゃないか……という気持ちになっていたけど、自然のなるままに任せよう……という気持ちになった。

また、ツアーを企画した旅館経営者 Y は次のように、ツアーの狙いを述べた。

・ツアーを企画した Y 氏

いろんな人の考えを聞きたい。そういうエコツアー。以前、うちで巨木ツアーとかやってた。巨木が枯れるのいやって常連さんおる。K（自然ガイド K 氏）が言うには、森は100年でみなきゃ。今だけみると伐採しようとする。ほっとけば百年かけて再生する。自然の摂理としてみたら、キクイムシはでかい木を倒して森を再生する使者としての役割を持ってるかもしれない。腐海が実は世界を浄化していたみたい。 [2020年9月26日聞き取り]

筆者と Y 氏は一緒に映画館で『風の谷のナウシカ』を観に行ったことがある。Y 氏は子供の頃からナウシカが大好きだった。連載中の漫画『風

の谷のナウシカ』をよく読んでいたという。「腐海」はナウシカの世界に登場する、猛毒の孢子を飛ばす菌類によって、人間が生活できない環境に変容したエリアを指す。「王蟲」等の蟲が生息する。「腐海」は『風の谷のナウシカ』の序盤では、人間にとって恐ろしい猛毒の存在だったが、ナウシカは、実は「腐海」が人間の活動によって汚染された世界を浄化していることを発見した。

ナラ枯れが「腐海」とのメタファーで捉えられるのは単なる筆者とY氏の共通の趣味によるものではないと考えられる。実際、ナラ枯れの発生に伴って、ナラ類の根に生えるカエンタケが増加している。カエンタケは、人間にとっては触れるだけでも炎症を引き起こす毒である。しかしキノコ博士U氏も言うように、カエンタケを含むきのこ類は枯れた樹木を分解し土に還す機能を持っており、カエンタケの発生を「自然の摂理」が循環する局面と捉えることもできる。

大山で活動するキノコ博士U氏は、県議会の反応を次のように語った。

・キノコ博士U氏

（森議員の）議会の録画を見ましたよ。至極当然の主張だと感じました。

環境省の公園区域図を確認しました。ほとんどが特別地域ですね（そこまで入っているとは思わなかったので……）。

特に日本は原生林なんてほぼ無いと言っていい位開発され尽くされていますから……近代に設定された国立公園の特別地域の意義を考えると、その地域は手を入れるべきではないと私も思います。安易に設定の方針を変えてしまうことを今後もやってしまっただけでは、国立公園や特別地域自体のあり方が??です（疑問です）。

自然界から見ればキクイムシの存在は自然なんですね、老齢の木の分解にも関わっているはず。ミズナラ、コナラ、クヌギ、寿命があります。国立公園設定前まではおそらく2次林であった大山のナラがその寿命になる年齢を迎えたということでもあると思います。

樹勢が弱れば、“菌”，昆虫，細菌，線虫，なんかの影響を受けるでしょうし、それらがいるから、木が分解されてまた土に還ってという物質循環が成り立つと思うのです。〔中略〕特別

地域以外のところ、普通地域以下これは萌芽更新を積極的に行う取組が必要でしょう。〔中略〕

キクイムシの駆除はできないでしょう。マリアの様にはいかないと思います。駆除にお金を費やすよりも、里山の荒廃あらためる萌芽更新を推進するような取組、予算が地域にもっと必要なんじゃないかなと思います。管理されずに遊んでいる里山は特別地域以外のところにたくさんあります。きのこ栽培は里山の荒廃を防ぐ手段であるのではないかと思います。きのこ栽培と里山は切り離せないですね。

あくまで自然現象だから誰が悪いわけではないですからね、反対とか賛成とか意見が分かれるような形にするんじゃないで、国と地域と一緒に何が良いか考えていかなければならないですね。ただ特別地域というのは学術的にもかなり重要です。安易に方針を変えては、日本の国立公園の存在意義が怪しくなります。手を出さないとこと積極的にだすところを理解するのは大事だと思います。

ブナ林の冬虫夏草の大発生も、蛾の大発生を菌類がうまく抑制していると言われます。人が手を出すと、なんかのバランスがまた崩れてしまうでしょうか。人と言うのは非常に影響が大きいですから、なかなか人を含めた生態系を考えるのは難しいですが、里山は人が維持して来た生態系の最たるものではないでしょうか。

〔2020年10月6日メール〕

U氏は、キクイムシを「自然のもの」と述べている。この点は、ナラ枯れが「社会的」な要因によって増殖しているという主張と対立している。

ここまで、森雅幹議員の意見を間接的に支持している人間関係を追跡し、ナラ枯れの語りを記述した。では、何かしなければならぬ、と考えて実践している人達はどのような論理で動いているのだろうか。

事例3 「大山さん」を助ける

大山ブナを育成する会は、「ブナ便り」と呼ばれる機関誌を会員に送付している。ナラ枯れ発生時には、「日頃ことあるごとに、『大山さんのお蔭だ』と感謝している人たちよ、今が恩返しチャンスですよ」と会員を鼓舞している（2020年8月

31日ブナ便り)。

ブナの会は、萌芽更新を実行するに際して、日本海新聞にボランティアを募集する記事を書いた。そのようにして集まった人々に、ブナの会メンバーのY氏は次のようにガイドを行っていた。

・メンバーY氏

自然の反対語って？人工だろうか？自然とは人の手が加わっていないことだろうか？では、私たちの身体はどうだろうか？心臓は勝手に動き、髪や爪は自然に伸びる。私たちの身体には不随意筋といって自然に動くものがある。動物だってそうだ。だからそれも自然のもの。私たちは自然の一部なんだ。植物は自分のからだを自分で作れる。動物は食べ物を食べないと作れない。自然の恵みがないと生きていけない。大山、ブナの林があるから美味しい水を使える。

[2020年10月17日聞き取り]

ただし、リーダーの吉岡氏は、確実性を持って萌芽更新を行っていたのではない。

・吉岡氏

ナラ枯れの予防間に合わない。食いつくすだろう。萌芽更新でなんぼか救っていけるんじゃないかと思ってやっている。俺もわからんで。教えてくれ誰か。

[2020年10月17日聞き取り]

また、吉岡氏は、次のようにも語っており、大山の森に手を加える行為が、今生きている私たちのためではないことを述べている。吉岡氏の別荘は大山山麓にあり、そこはブナを育成する会メンバーの秘密基地のようにになっている。

・吉岡氏

今我々は良い思いして住んどるんだけど、それは100年前の仕事だ。川の土手を築いたのは江戸時代。土手を踏み固めるために土手の下に神社を設けた。人がお参りして踏み固めるように。桜を植えたりした。江戸時代に物事があった。東海道五十三次どこをみても山が剥けている。それだとまずいので江戸幕府が木を植えさせた。今の時代は金にならん時代になった。要

は何で木がなくなったかという薪につかった。

・メンバーH氏

あの当時は城とか神社にすごい木を使った。

・吉岡氏

江戸時代には色々なことをしている。京都から江戸に都を移したのは、武蔵野の木を目指して江戸に変わってきたとか。それと水というのは、日本で水がとれるのは川が必ずある。100年後に我々がお蔭を受けているの。水を凄く大事にしていた。みんなを集めて話したらいけんってときだけど、講演のときは、SDGCかな？GSかな。そういうのを皆さんに知ってもらおう。おれたちがやっちょることは、100年後のことをやっちょるわけだけん。参加される人もみんなそうだよと、誇りをもってもらいながら人にも話をできるようには、ナラ枯れにつなげるのには、ポスターもだけど、そういうことも利用して、他所のグループを、心を一つにしなければナラ枯れは上手くいかない。竹村幸太郎の本買って読まんといけん。広重の浮世絵が語るものってやつがある。おい大学院生(筆者)、そげなの勉強しておれたちに語って聞かせえやあ。

・メンバーH氏

SDGsに関連するか分からんけど、1年に1トンの二酸化炭素を吸収するんだって。人間は1年間に10トンの二酸化炭素を呼吸を含めて燃料とか生きる術で放出する。1人が出した二酸化炭素を吸収させるためには、100歳になるまでに1000本の木を植えなさいと。

・吉岡氏

まあいろいろな本にいろいろな説があるけど、1本のブナの木を植えたら大体5人とか10人くらいが空気を吸う権利がある。大盤で空気吸っていい。おれはもう空気入らんけど。いろんな説があるんですよ。おい大学生、ちゃんと覚えとけよ。

[2021年5月22日聞き取り]

メンバーのH氏は、黒田教授が紹介したタツ

トマンの著書を読んでいて。吉岡氏は、100年後に人も暮らしていることが企図されており、100年後あるいは何千年後にどのような形になっているか分からない「自然」の価値を重視する態度とは対照的である。

また、吉岡氏はブナの会の集会の中で、行政に対して「お前らのためにやってるんじゃない。大山さんを助けるためにやってるんだ」と憤っていた（2020年9月26日聞き取り）。行政は、国有林の苗を県有林に植えるなどの法的な境界線に拘る。また、山からブナの若木を持って降りる際にも、長さを揃えさせようとする。行政による森林の管理は、ブナの会にとって沿う必要のある「保全」の論理であるが、動因は「大山さん」との互酬性にあると考えられる。

ブナの会は、黒田教授から配布された資料を用いて子どもたちに講義をしている。おそらく彼らにとって、大山の里山の部分に手を入れなくなったことによるキクイムシの増殖が森を枯らしているものであり、手を加えることは自然の摂理に介入したことには当たらないのである。

また、手を加える人間の側も、髪や爪、心臓の鼓動の自律性を挙げることで、「自然」の摂理を内包し大山と連続する存在であることをガイドしているのではないだろうか。自然の反対語である人工の行為として樹木に触れるのではなく、「自然」の一部として触れることを可能にしようとしているのではないかと筆者は考える。

5 考察と展望

大山のナラ枯れをめぐる論争をどのような思想の複合として捉えられるか。

「自然」を護る人々は、「保全」の論理もありながら、概ね「原生自然」の価値、自然そのものの価値に基づく「保存」の論理に従っていると言える。「保存」の論理は、国立公園内であることが根拠として動員されている。

森雅幹議員の質疑では、キクイムシは「大山」の外部からやってきたものであるか否か、「日本の在来種」であったかどうか問われた。またキノコ博士U氏の意見では、キクイムシが「自然界から見たら自然のもの」であることが述べられた。

国立公園内で発生している「自然現象」に介入しないだけでなく、国立公園の外と連続した自然

の摂理への畏怖としても捉えることができる。

また、自然の摂理への畏怖は、『風の谷のナウシカ』に登場する「腐海」（簡易的に「人間の生活を脅かすと同時に自然を浄化するメカニズム」としておく）のメタファーとも合致していた。大山で観光業を営む人々、ガイド、また宗教家等は、大山の「自然の摂理」を畏怖する傾向がみられた。

他方で、自然に介入する「萌芽更新」を推進した民間のボランティア団体「大山ブナを育成する会」においては、「大山さん」を助けることがモチベーションとして重要であることが考えられた。「大山さん」を助けることは、「保全」の論理とは異なる。黒田教授等の発表資料を用いて「保全」の論理を利用しており、行政とも連携を保っているが、研究者の知見を用いることは、「県の責任ある関係者各位も動かさざる得ない状況を演出」する目的も含まれている（2020年9月2日「ブナ便り」）。従って「保全」の論理は、「大山さん」を助けることからするとおそらく本質的な問題ではないと考えられる。ブナの会に10年ほど参加しているK氏は、「大山さん」について「仏さまみたいな感じ」と言っていた（2021年9月11日聞き取り）。「大山さんのおかげ」というワードは、近年大山のイベントで度々メディアによって表象された文言である。鳥取県議会では浜田妙子議員が「大山さん」、「魂の山」、「自然に向き合う」といったワードを発言したが、「大山さん」は「自然」でもあるものの、「自然保護」の対象として収まらない存在であることが示唆された。従って、ナラ枯れへの対応をめぐって「大山さん」が議論に登場した際には、「保全」と「保存」の論理に振り分けることが困難な論理を内包していることに留意する必要があるだろう。

ところで、「大山さん」とはどのような存在なのだろうか？ 吉岡氏は次のように語った。

・吉岡氏

「大山さんのおかげ」はあんたたち（筆者を含む、大山山麓地域に長年住んでいない研究者を指すニュアンス）には分かんない。でもそんなに難しい話じゃない。おれの上の世代は、「大山」という言葉は一切ない。「大山さん」。アメダスとかないから、毎日空見上げた。神頼み。

新聞もテレビもないから。そういうのが「大山さん」。昔は村で水番があった。夜交替で（田んぼに水を引く）栓を抜く奴がおらんか見張る。雪が降ると今の人は嫌がるけど、貯金なんだもん。水の。大きい山だから、しっかり降っても水害がない。台風も、テレビ見たらまっすぐ向かってきてるのに逸れる。「大山さん」って言うのは「大山さん」と幼いころから何らかの形でかかわってきた人だ。「大山のおかげ」というけど、（今は）「災害の被害が少ない」くらいの意味で使われる。70、80くらいの人、要するに、昔の人は言う。アナログでしとるわけだから。今はアメダスでいかにも分かるように見せるわけだけど、昔は空見て観展望気した。今でも山である程度分かる。北アルプスに山登りいったけどでん。365日「大山さん大山さん」っていつて眺めとるわけだから（できる）。

[2021年12月18日聞き取り]

吉岡氏にとって「大山さん」は、農業や観展望気といった生活形態において365日「大山さん」を眺めて生活してきた者が分かる感覚である。また、ブナの会のメンバーではないが、大山山麓地域に住んでいるおばあちゃんGは次の様に教えてくれた。

・おばあちゃんG

昔、「大山まいり」という風習があった。「大山さん」を聞こうと思ったら、85歳から90歳の人に聞かんといけん。私のような当時の小さい子どもたちが、大人たちが沢山大山に向かって歩いているのを見ている。どこいくのかなあって見てた。土地土地に、大山に向かうたくさんの道があった。

・筆者

何かお返しするの？

・おばあちゃんH

ただ参るだけ。

[2021年12月29日聞き取り]

「大山さん」からは基本的には助けてもらう一方であるように思われるが、100年近く前までは、

「大山まいり」の風習が残っていた。それが「大山さん」のおかげへのお返しの意味があったかどうかは今後調査する予定である。「大山さん」との互酬性は、ナラ枯れを契機として萌芽更新を行おうという吉岡氏らの運動以外では筆者は未だ発見していない。現代において「大山さん」との互酬性は、薄いものになっているか、十全な形で遂行されていない可能性がある。ブナの会のリーダー吉岡氏はおおよそ80歳になり、大山まいりを幼少期に経験していた可能性はある。お返しする機会を広く共同で行うことのできていない状況だからこそ、「今こそ」お返しする機会だという感覚があったのではないか。その場合、リーダー吉岡氏（及びメンバーの一部）だけでは不可能な実践を協働的に行うためにも、「保全」の論理と接続していると考えられる。

今後「大山さん」との伝統的な互酬性は、殆ど遂行不可能な生活形態、環境条件になっている可能性についての検討と、そのうえで、ナラ枯れ論争において「自然」を護ることと「大山さん」を助けるという言説が同時に登場することの意味について研究を進める必要がある。

6 参考引用文献

- 黒田慶子・太田裕子・佐橋憲生（共編）. 2020. 『森林病理学：森林保全から公園管理まで』. 朝倉書店.
- 小林正秀・上田明良. 2005. 「カシノナガキクイムシとその共生菌が関与するブナ科樹木の萎凋枯死：被害発生要因の解明を目指して」. 『日林誌』 87, 5号：435-450.
- 衣浦晴生. 2008. 「病原菌の媒介甲虫 カシノナガキクイムシ」. 黒田慶子（編）. 『ナラ枯れと里山の健康』. 林業改良普及双書.
- 井田秀行・高橋勤. 2010. 「ナラ枯れは江戸時代にも発生していた」. 『日本森林学会誌』. 92, 2号：115-119.
- 鬼頭秀一. 1996. 「自然保護を問い直す：環境倫理とネットワーク」. 筑摩書房.
- Guha, Ramachandra. 2014. *Environmentalism: A Global History*. Penguin Random House India.
- 高畑義啓. 2008. 「ナラ枯れとは何か」. 黒田慶子（編）『ナラ枯れと里山の健康』. 林業改良普及

- 及双書. 25-44.
- タットマン, C. 1998. 『日本人はどのように森を作ってきたのか』. 熊崎実 (訳). 築地書館.
- ツイン, A. 2019. 『マツタケ：不確定な時代を生きる術』. 赤嶺淳 (訳). みすず書房.
- 長尾隼. 2012. 「戦前期の伯耆大山におけるツーリズム空間の形成」. 『古代文化研究』 20: 157-180.
- 『日本海新聞』. 2020. 「大山ナラ枯れ深刻 大山寺－榎水高原「昨年の倍以上」 日野郡へ南下の恐れも」. 2020年8月27日朝刊.
- 福島万紀. 2017. 「島根の山村で「ナラ枯れ」にむきあう：仲間と行う山仕事から見えたこと」. 白石壮一郎・椎野若菜 (編). 『社会問題と出会う』 古今書院. 98-115.
- 丸山康司. 2008. 「『野生生物』との共存を考える」. 『環境社会学研究』 14：5-20.